

だいいちぶ だいいちわ
第一部 第一話 おしたに伝説

そうねえ、今いまから何なん年ねんぐらい前まえのことかねえ。この北きた潟がた東ひがしのさんまい道みちを二キロぐらい登のぼって
いくと、大おおきな穴あなが一ひとつあいていたんや。その穴あなの右みぎ側がわには、昔むかし、水みずがしゆくじゆく出ていて
ねえ、その上うえは、いつもお天てんとうさんがあたるようになって、穴あなの奥おくから生なまぬるい風かぜが吹ふいてくる
んや。

だれかが住すんでいたそうなんやけど、その姿すがたはだれも見みたことないんや。そこで、その隠かくれて住すんおつた
人ひとを、『いんじや』と言いったんやと。そのころの北きた潟がたは、びんぼうな村むらやったんや。ほやのう、例たとえば、
こんなことがあつたんや。

ある日ひ、大だい吉きちさん家ちで、お葬そう式しきがあつたんや。それには人ひとをよつだいなあかんのや。ほやけど、お椀わん
やお膳ぜんなんか、だれも持もっていないあつたんや。でも、お椀わんとかお膳ぜんとかがなけんとかあかさかいに、おし谷たに

の穴の^{あな}前^{まえ}に行^いって、いんじ^{さま}様^{さま}にお願^{ねが}いしたんやと。

「あした、うらんとこの葬^{そうしき}式^{しき}やさけんてに、お椀^{わん}とお膳^{ぜん}を貸^かして下^{くだ}されな。」
と、何^{なん}人^{にん}前^{まえ}も頼^{たの}んだんやと。

あくる日^ひ、もう一^{いち}度^どお願^{ねが}いに行^いくと、穴^{あな}の前^{まえ}にはちゃんとお椀^{わん}とお膳^{ぜん}がそろえてあつたんや。大^{だい}吉^{きち}
さんは大^{おお}喜^{よろこ}びで、そのお椀^{わん}やお膳^{ぜん}を持^もって帰^{かえ}つての、ごちそうを盛^もって村^{むらびと}人^{びと}たちに出^だしたんやと。

ところが、そのお椀^{わん}やお膳^{ぜん}はあまりに美^{うつく}しくての、村^{むらびと}人^{びと}の中^{なか}にはもて遊^{あそ}ぶ者^{もの}がいたんやと。そ
うやっているうちに、そのお椀^{わん}の一^{ひと}つをだれかが踏^ふんづけて、割^わつてしもうたんや。

村^{むらびと}人^{びと}たちは、どうしようかと思^{おも}い悩^{なや}んだんやと。そんな中^{なか}、
ひとり^{ひとり}の若^{わか}者^{もの}がこう言^いうたんや、

「こんなにぎょうさん貸^かしてもろたんやさけ、一^{ひと}つぐらい
返^{かえ}さんでも分^わからんやろう。」

つてね。次^{つぎ}の朝^{あさ}、



「ほんとうに、ありがとうございます。」

と、割ったことを黙って返してしまつたんや。

それから一ヶ月過ぎたんや。今度は、村にお嫁さんが来るようになっての。村人たちは、またお椀やお膳を、いじん様の所に貸してもらいに行つたんや。

「お椀とお膳を、三十ばかり貸して下せえ。おねげえします。」

と、頼んだんや。

次の日、それをもらいに穴の所に行つたんや。次の日も、そして、また次の日にも行つたんやけど、一つも貸してくれんかったそうな。もし、お椀を割ってしまった時、

「割つてしもたんです。すんまへん。」

と、正直に謝つておけば、どうなつていたんやろう。次ん時にも、貸してくれたやろうかねえ。